

成人期の広汎性発達障害者への支援におけるデイケアの役割について

長野県精神保健福祉センター（長野県発達障害者支援センター）

○小坂 勇太 小泉 典章 竹内 靖人 今井 敏弘
吉沢 詠子 伊藤 真紀 鈴木 理紗

I はじめに

本県における保健所の成人期広汎性発達障害者デイケア（以下、PDD デイケア）は、現在 6 か所の保健福祉事務所、1 か所の市保健所（以下、あわせて保健所と表記）で実施されている。利用者数は年々増加しており、成人期支援における PDD デイケアへのニーズの高さがうかがえるが、その位置づけや効果について十分に検証できていなかった。

そのため、PDD デイケアの利用経験者及びその家族、保健所を対象に質問紙による調査を実施し、PDD デイケアを利用することによって得られる社会参加状況の変化、及び利用経験者自身の感じている内的な効果等についてまとめ、成人期支援の中での PDD デイケアの位置づけを考察する。

II 方法

1 調査 I 本人・家族による PDD デイケアの評価

(1) 対象 ①PDD デイケアを現在利用している方（以下、利用者）、②2012年12月1日現在ですでに利用を終了した方（以下、終了者）、及び③その利用者あるいは終了者の家族（以下、家族）のうち PDD デイケアスタッフが依頼可能と判断した方 88 名（利用者 36、終了者 10、家族 42）

(2) 質問紙

ア “PDD デイケア利用期間” や、“利用開始時及び現在のつながっている機関等” の回答を求めるフェイスシート項目

イ 以下の全 35 項目について、それぞれ「あてはまる」「ややあてはまる」「どちらともいえない」「ややあてはまらない」「あてはまらない」の 5 件法による回答を求めた。

① “デイケアを利用した最初の理由” 9 項目

② “利用してよかったこと” 11 項目

③ “利用している現在（既に終了している場合は終了時）の理由” 9 項目

④ “暮らしていく上で必要だと思う支援” 6 項目

回答者の属性で比較するため、本人、家族とも聞き取る項目を統一させた。同様に PDD デイケアの利用前後の比較をするため、①、③の 6 項目を同一にした。

(3) 調査期間及び回収方法 2012年12月3日～12月27日 原則郵送による回収

(4) 回収率 72.7%（回答数：利用者 29、終了者 5、家族 30）

2 調査Ⅱ PDD デイケア運営状況及び利用者状況

- (1) 対象 PDD デイケアを運営している 7 保健所
- (2) 質問紙 ①PDD デイケアの開催頻度や参加スタッフの構成等の“運営状況”、②把握している利用者及び終了者それぞれの“利用者状況”として、利用目的、終了理由、利用前後のつながっている機関等について回答を求めた。
- (3) 回答数 7 保健所から、利用者状況 47 名分（利用者 28、終了者 19）の回答を得た。

Ⅲ 結果

1 利用者及び終了者について（調査Ⅰより）

回答した利用者及び終了者（以下、本人）34 名のうち男性が 26 名、女性が 8 名であった。2012 年 12 月 1 日現在の PDD デイケア利用期間は 1 年未満 5 名、2 年未満 9 名、3 年未満 1 名、4 年未満 3 名、5 年未満 7 名、6 年未満 1 名、6 年以上 7 名であった（図 1）。

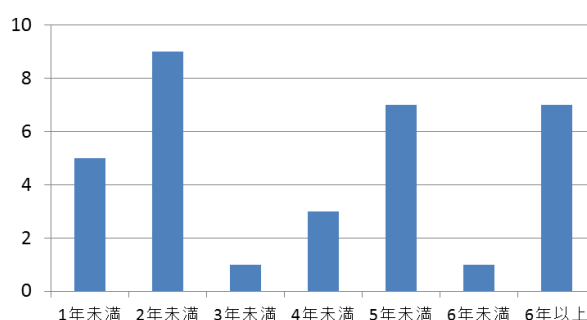


図1 回答者本人のPDDデイケア利用期間(2012年12月1日現在)

PDD デイケア利用の最初と現在（終了時）それぞれについて、属している機関または PDD デイケア以外に定期的に通っている場所についてたずねたところ、図 2 のような回答を得た。「一般就労」「障害者就労」「就労継続支援施設」「その他」の人数が、最初よりも現在（終了時）の方が多くなっており、「学生」「PDD デイケア以外に通うところがない」の人数が少なくなっていた。

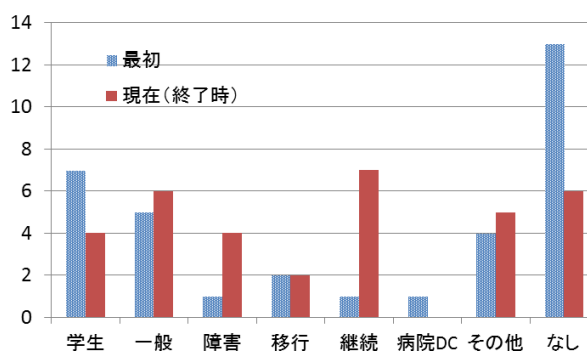


図2 利用前後のPDDデイケア以外の所属(利用)機関

2 回答者の属性と利用前後の比較

本人、家族に対し“利用しようと思った最初の理由”、“現在（終了時）の利用している理由”それぞれについて尋ねたところ、図 3、4 のような回答を得た。全体的に利用することで得られる効果への期待は家族の方が高かった。「利用料がかからない」については、本人、家族とも理由としては利用前後とも“あてはまらない”方に評価していた。

各項目において属性（本人、家族）と利用前後（最初、現在）で 2×2 の分散分析を行ったところ、「生活リズムを整える場として」($F(1,62)=6.23, p<.05$)、「人との関わり方を学ぶ（SST 等）場として」($F(1,62)=15.49, p<.01$)、「同じ障害をもつ人と話がしたいと考えて」

($F(1,62)=10.00, p<.01$)、「広汎性発達障害者に限定しているから」($F(1,62)=7.58, p<.01$)において属性の主効果のみが有意であり、本人よりも家族の方がPDDデイケアの理由として高く評価していた。

また「人と接する機会として」において交互作用が有意 ($F=(1,62)4.35, p<.05$) であり、最初 ($F(1,62)=10.20, p<.01$) 及び現在 (終了時) ($F(1,62)=15.37, p<.01$) において家族の方が有意に高く理由としてあげていたが、本人においては最初よりも現在 (終了時) の方が有意に低くなっていた ($F(1,62)=14.04, p<.01$)。「就職のための準備として」においては交互作用に有意傾向 ($F(1,62)=3.84, p<.10$) があり、現在 (終了時) において家族の3.3よりも本人の理由が2.3と有意に低く ($F(1,62)=7.73, p<.01$)、本人においても最初の2.8よりも有意に低かった ($F(1,62)=4.66, p<.05$)。

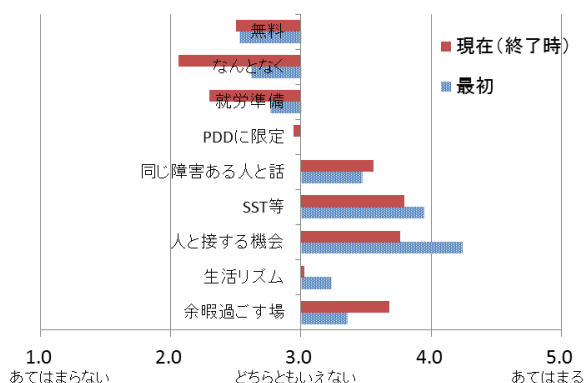


図3 本人がPDDデイケアを利用する理由

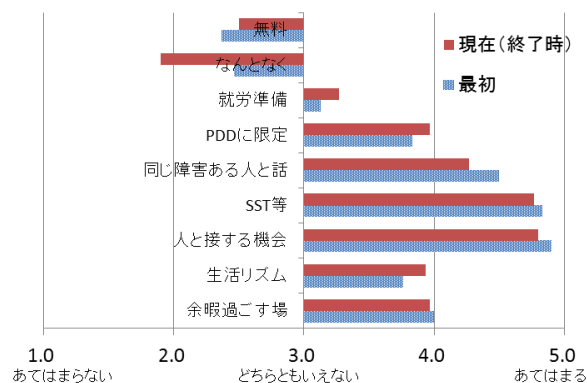


図4 家族がPDDデイケアを利用して欲しい理由

3 利用期間による本人が感じるメリットの変化について

PDD デイケアの利用期間によって、本人の感じる利用のメリットがどう変わるのかを検討するため、仮に利用期間が2年未満の群 (14名) と2年以上の群 (19名) とに分け、図5に示した。多くの項目において2年以上利用した群の方がメリットとして高く評価していた。

そこで、各項目について利用期間との相関を調べたところ、「自信がついた」と中程度の相関があった ($r=.42, p<.05$)。また「人と具体的な関わり方を学べた」($r=.34, p<.10$)、「家族との関係がうまくいくようになった」($r=.34, p<.10$) で弱い相関がある可能性が示唆された。

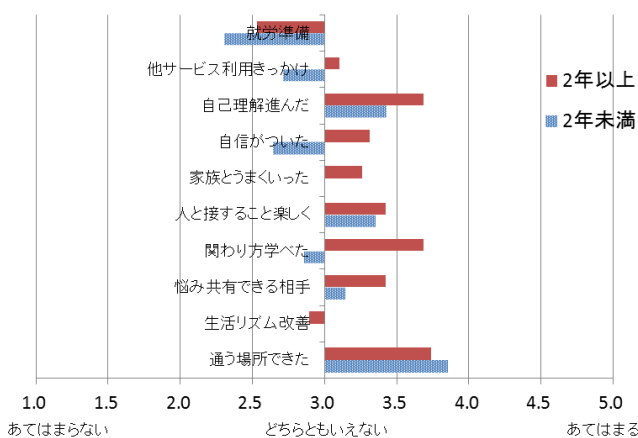


図5 PDDデイケア利用期間別「良かったと思う」項目

4 PDD デイケア終了者の利用前後の状況（調査Ⅱより）

保健所スタッフが記入した利用経験者のうち、24年12月1日現在ですでに終了している方（19名）について、利用前後のそれぞれで“利用していた（つながっていた）機関等”を図6にまとめた（複数回答）。

利用の最初に比べ、利用終了時に「一般就労」「障害者就労」をしていた方が多かった。

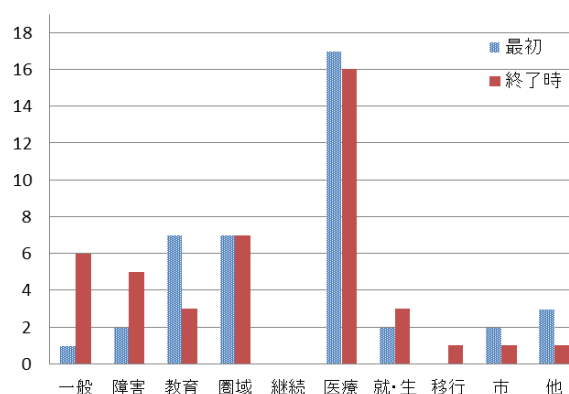


図6 PDDデイケア利用前後における利用機関

IV 考察

本人34名（終了者5名を含む）の回答から、PDD デイケアの利用開始時から現在（終了時）に至るまでに、PDD デイケア以外に定期的に行くところがなかったケースが減り、逆に就労継続支援施設につながったケースが多く、また保健所回答の19名の終了者の状況から一般就労、障害者就労につながったケースが多かったことがわかった。ただ、本人の意識としては必ずしも就労準備という目的で利用しているわけではなく、余暇を過ごす場、他者と接するための場として位置付けていた。しかし、利用していく中で“安定した対人関係”と“自信”につながり、結果的に就労に結びついていたことが示唆される。

また家族の自由記述より「発達障害を理解した支援者がいることが希望につながった」「自分の意志で“行きたい”と思える仲間や場所ができた」「同じ悩みを持つ家族の方と知り合えて本当に良かった」との意見もあり、本人、家族にとっても、理解がある支援者がいる中で安心できる場があることは意義深かったと思われる。

これらより PDD デイケアは、就労あるいは事業所利用を目的とする場合も、その前段階として他者とのコミュニケーションや社会参加の意欲の向上、同時にそれらに対する自信の回復の場として重要な支援資源であることが示唆された。

V 結論

今回、調査を通して県内の保健所が実施する PDD デイケアの効果と位置づけについて検討し、その必要性について示すことができた。今後、このような支援資源が保健所以外の機関にも必要であると思われる。

[資料] この資料は、神奈川県発達障害者支援センター永澤優子氏による PDD デイケアの見学報告であるが、外部の方の率直な評価であり、貴重な記録と思われるので、ご本人の了解を得て掲載する。

- 1 視察日時 ① 長野県諏訪保健福祉事務所 広汎性発達障害者デイケア視察
平成 24 年 12 月 11 日 (火) 13:30~15:30
* 広汎性発達障害者デイケア視察
- ② 長野県上田保健福祉事務所 広汎性発達障害者デイケア視察
平成 24 年 12 月 12 日 (水) 13:30~15:30
* 広汎性発達障害者デイケア視察

2 内容と所感

本事業は、平成 12 年度から長野県精神保健福祉センター（長野県発達障害者支援センターの役割を兼務）が中心となり、長野県独自の地域保健事業として展開している事業である。県内 7 カ所にある各保健福祉事務所をそれぞれ主催とし、各所管区域に在住の高機能自閉症、アスペルガー症候群、広汎性発達障害者を対象とする。スタッフとして同事務所保健師、発達障害者支援センター職員、障害者総合支援センター職員が参加し運営している。

デイケアの大まかな内容は、作業とフリートークである。

メンバーは各地域で様々で、年齢層、性別には偏りがある。今回見学した諏訪は 20 代女性の参加者が大半を占め、上田では全員が 20 代男性の参加者であった。

運営の細かい点で、発達障害に対する以下のような配慮が見られた。

① 視覚支援と構造化

- ・フリートークやフリータイムをただ与えられても、発達障害者が混乱しやすいことに配慮する工夫がある。例えば会の始まりと終わりには必ず決まった活動を行っている。会の最初には必ず「体調と近況報告」を行い、終わりの会では一言感想を発言するのがパターン化されている。また、諏訪地域では司会の台詞を紙面で用意している。台詞まで形式を設定することが、かえってアイスブレイクになり、最初は発言ができない参加者が、徐々に緊張が解け、自然な発話が促されている。
- ・会の流れはホワイトボードや紙面に記載し、見通しを持たせる。開始と終了の時間は守る（ただし、終了後の雑談は阻害しない）。
- ・活動内容は事前に予告する。昨年行った活動の資料を必要に応じて紙で見せ、イメージを持たせる。

② 輪に入れない子への積極的な配慮

- ・発達障害者は関心の幅がそれぞれ全く違うため、話題ごとの温度差が激しい。輪に入れない話題になると、その場では平気な顔をして過ごしているように見えて、後から「あの時辛かった」とフェードアウトすることが多い。本人の自発性を待つ対応よりも、積極的にスタッフが声かけをし、話題を振る配慮がある。

③ 個人の特性の把握、体調面の把握

- ・個々の趣味、得手不得手、コミュニケーションの特徴を事前に把握している。本人の語りから不十分な点は、繋がりのある支援機関に事前情報をもらう、実施日前に保護

者から本人の体調を聴取する等、第三者から情報を得て保管する地域もある。言語表現力に困難さのある対象者への配慮が見られる。

会の雰囲気は全体的にアットホームである。集団作業の中にはSSTも含まれるが、機能訓練の場としてより、『心温まる居場所』として位置づけられている。

参加者は、一貫して集団活動に心理的不安や自信の無さを抱える方（あるいは抱えていた方）が多いように見受けられる。見学中には、「こういう振る舞いは失礼に値するのでしょうか？」「今、私、空気読めていましたか？」「あ、ごめんなさい！ごめんなさい！」等、周囲の評価を気にしすぎる発言が多く聞かれた。訓練によって本人の就労支援を積極的に行うよりも、家庭生活にある発達障害者の最初の居場所として意義深いように感じられた。

参加者に、自分にとってこのデイケアはどんな場所かインタビューをした回答は以下の通り。

- 自分にとって「あるのが自然」と思える場所
- 外に出るきっかけになった
- 最初は生活のリズムをつけるためだった。今は、グループ自体が自分の余暇。
- どこにも行く場所がない間は、理由のわからないストレスが常に溜まっている生活だった。生活にリズムができた
- 月2回というペースも良い。それ以上あったら来られないし、それ以下だったら忘れちゃう。
- 初めて仲間が出来た場所になった。
- ここが無ければ就職はなかった。
- ないと困る場所。
- なくても困らない場所。でも、「こういう想いをしているのは自分だけではない」と思える場所。

3 まとめ

デイケア視察し、発達障害者に対する訓練機関や相談機関が徐々に整備される中で、このような家庭生活から出る最初の一步となる「心の居場所」の必要性を改めて感じた。

成人期支援の大きな目標の一つが就労であるため、就労訓練やSSTの必要性ばかり目が向けられるが、成人期の引きこもりケースの多くは、障害特性に苦しむよりも、二次障害的な症状や慢性的な社会不安感で動けなくなることが多い。負のイメージが固着しやすい発達障害者にとって、SSTを学ぶ前に、「集団にいても攻撃されない」「集団は暖かい」学習を積む場として、地域に居場所があることは意義深いと感じた。